



青年海外協力隊マレーシア会 21号

JICA パラオ事務所開設 25 周年を迎えて

元初代 JICA/JOCV パラオ事務所長
草野 忠征(昭和 40 年度 1 次隊 稲作)



【ニッコウホテルからのパラオ松島】

私は、パラオにおける JICA 事業が今年 25 年周年を迎えた事を JOCV 機関紙クロスロード 6 月号で知りました。そこで、事務所開設までの経緯を知っていただきたく以下述させていただきます。

思い起こせば、25 年前（1997 年 5 月）、パラオに JICA 事務所を設置するため事前調査に行くよう突然出張命令を受けました。

パラオ到着後、パラオには不動産業を営む店はなく、まず、今後 JICA の窓口になる国務省の外務局長（Mr. カナイ）にご挨拶（仁義を切って）し、私の出張の目的等説明し事務所に適当な物件の紹介を依頼しました。そこで 3 件ほどの候補物件が確保でき、JICA で検討した結果、警察署・消防署、国会議事堂、郵便局、電信電話局等が近く、事務所スペースとしては適当な面積が確保できる物件であると云う事で現在の物件に決定しました。

1997 年 6 月私は、JICA/JOCV パラオ駐在員事務所長としてパラオに赴任しました。

事務所物件の部屋を改装して事務所機能が確保できるまで、ホテルの自室で事務作業を行いました。ツインルームのベット 1 台には、書類が並べられ、書類整理台として使用しました。



1996年9月崩壊したKB橋
右側は仮の浮き橋



戦車の残骸

私が赴任後しばらくして、吉田潤子調整員が到着しました。調整員は、連絡文書の作成や事務用品の購入手配等事務所の環境整備作業に貢献してくれました。また、連絡文書は国際通信料金が割安になる午後9時以降に発信することにして、夜分遅く電信電話局へ行ってもらうこともありました。

ローカルスタッフは、事務所の家主である元通産大臣の紹介でその秘書であった人（Ms. アイリン）を採用することにしました。家主は、南洋留学生として熊本大学工学部を卒業しており建築の専門家です。しばらくしてローカルスタッフをもう一人（Ms. オルガ）を採用しました。Ms. オルガのお祖母さんは、事務所が隊員用として用意している書籍（特に小説・文学書等）を借りに来るほど日本語の堪能な方です。

そして、1997年8月パラオ派遣第1次隊4名（看護師2名、野球・陸上各1名）を受け入れました。

パラオにおける JICA 事業は、JOCV 以外にも水産関係専門家が以前から派遣されており、ODA による漁港の整備や、発電施設・水道施設・島と島を結ぶ海上道路整備等が行われてきました。在任中も、1996年9月崩壊したコロール島とバベルダオブ島を結ぶ KB ブリッジの架け替え工事、サンゴ礁センターの建設、コロール空港ターミナルビルの改修などの計画が進行していました。

一方、太平洋戦争時代は、ご存じのとおりパラオに南洋庁が設置され、南進の最前線でした。

これによりパラオ国民の名前には、前大統領の「ナカムラ」さんや「タロウ」さんなど日本語が由来する名前を持った人が多く居ます。言葉にも「ズメン」「ミツモリ」「ベントウ」「シュウカン」など日本語がパラオ語として用いられています。

この様に、パラオと日本との関係は深く、昨今の国際情勢（中国進出の脅威）を考えますと日本とパラオの関係は、末永く良好な友好関係を続けていく必要があります

そこで、次のようなメッセージを JICA パラオ事務所に送りました。

私は、パラオにおける JICA 事業が25周年を迎えた事を JOCV 機関紙クロスロード6月号で知りました。おめでとうございます。嬉しく思います。

パラオにおける JICA 事業が25年目を迎えることが出来たのは、パラオ国民の皆様の理解と協力の賜物だと、パラオ国民の皆様に感謝申し上げます。

また、JICA 海外協力隊員及び JICA パラオ事務所のスタッフ皆様のご尽力に敬意を表します。

国際情勢は穏やかではない昨今、今後ともパラオと日本との固い友好関係が末永く続くと共に、パラオでの JICA 事業が事故なく展開されることを祈念します。

2022年6月20日 記

緊急帰国から復帰、そして…

大西 寛 (2018 年度 4 次隊、2021 年度 9 次隊 理科教育)

ペナン島の理数教育センターで活動しています。昨年の 12 月にマレーシアへ戻って来ましたが、1 年の活動を終えて 12 月には日本に帰国予定です。私はコロナ禍でマレーシアからの退去を余儀なくされた後に復帰できた隊員のひとりです。活動期間中は毎月日本の隊員仲間、元同僚、教え子等に通信を配信してきました。退去から復帰までの経過を通信に記載した内容を抜き出して紹介させていただきます。

「全土封鎖・緊急帰国」通信 12 号 1 面見出し (2020 年 3 月 31 日) 以下記事の一部

3 月 16 日(月)夜にマレーシア首相は急激に広がっている新型コロナウイルスの感染防止のために国内全土の封鎖を発表しました。これを受けて JICA マレーシア事務所からも今後の活動のありかたについて連絡があるだろうと待機しました。飛び込んできたのはマレーシアだけではなく全ての派遣国の JICA ボランティアが日本へ緊急帰国するという東京本部からの指示でした。

「再派遣 目処立たず」通信 13 号 1 面見出し (2020 年 4 月 30 日)

感染拡大が続いている現在の状況では再赴任の目途を今は立てられない。再赴任の可否の検討は続けられて、最終的な検討結果は 7 月上旬に連絡されることになりました。

「待機期間を特別延長」通信 16 号 1 面見出し (2020 年 7 月 31 日)

今年度中の再派遣を期待して、派遣合意書を解除しない待機期間の特別延長を申請しました。

「戻るまで通信休載します」通信 22 号 1 面見出し (2021 年 1 月 31 日)

今月中旬から下旬に成田からマレーシアの首都クアラルンプールに渡航する予定で先月から作業が進んでいました。(中略) マレーシア政府は 13 日より首都クアラルンプールおよびペナンを含む 5 州で、州・地区間の移動の原則禁止を含む制限令を発表しました。このことにより再渡航の計画を再調整しなければならなくなったと連絡がありました。

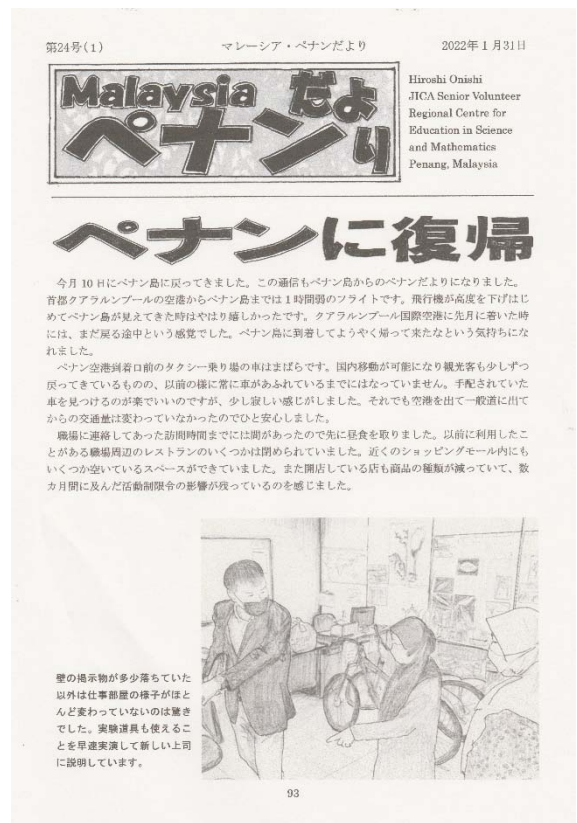
「ペナンだより再開」通信 23 号 (2021 年 12 月 31 日)

今月 23 日(木)の夕方にクアラルンプール国際空港に飛行機が着陸し、1 年 9 カ月ぶりにマレーシアに戻ってきました。

「ペナンに復帰」通信 24 号 (2022 年 1 月 31 日)

*右に 1 面を貼り付けています。

私はマレーシアへ復帰できた最初の隊員でした。そして退去前の状況を知っている一番古い隊員でもありました。そこで以前行われていたボランティア総会の復活を企画し、今年の 7 月に対面での総会を行うことができました。これで隊員がいなかった 1 年 9 カ月の期間を少しうめられたかなと思っています。



メール会員の方にはお知らせしましたが、10月27日にマレーシア東方政策40周年記念特別セミナーが開催されました。開催場所が福岡のため、参加できなかった方のためにセミナー内容を寄稿していただきました。

マレーシア東方政策40周年記念特別セミナーのご報告

Look East Policy：過去、現在、将来の展望

松永 典子（平成3年度1次隊 日本語教師）

・・

日時：2022年10月27日（木）18:30-21:10

場所：九州大学医学部百年講堂・中ホール1（福岡市東区馬出3丁目1番1号）

◆ セミナー実施の趣旨：マレーシアで1982年に始まった東方政策（Look East Policy）により、日本人の労働倫理や勤労意欲、道徳などを日本から実地に学ぶことで、マレーシアの経済・社会発展が目指され、2万6,000人を超えるマレーシア人留学生や研修生が来日しました。そして、大学、企業、JICA等での留学や研修における学びや体験を糧にマレーシアの発展を支えるとともに、マレーシアと日本の交流を牽引する人財として活躍しています。本セミナーでは、東方政策40年という記念の年に、東方政策の申し子とも言えるJICA職員、大学教員のおふたりに、日本留学の経験が自身にとってどのような意味をもつのかについて語ってもらいました。おふたりは、本年8月に東方政策の主導者・マハティール元首相にインタビューも敢行しています。そうしたマハティール元首相とのインタビュー内容も含め、おふたりの個人史をもとに、東方政策を振り返るとともに、日本とマレーシアの今後の展望についてもお話をうかがいました。

講演1：「日本留学と私：広島・南方特別留学生、お好み焼き」

ヌルハイザム・アザム・ビン・アリフ氏（Nurhaizal Azam bin Arif）

広島市立大学国際学部・准教授

プロフィール：マラヤ大学東方政策日本留学特別コース、富山大卒。2017年から広島市立大学に赴任。

専門は国際ビジネス、経営学、商学。国際ビジネス及びダイバーシティの視点からハラール・ヴィーガンという新たな食のスタンダードの展開や戦争の惨禍の中で生まれたお好み焼きの歴史についても研究。

広島赴任をきっかけに広島で被爆した南方特別留学生に関する史実を記録として後世に残し、マスコミやSNSを通じてマレーシアの人々にも伝える活動に精力的に取り組む。

講演2：「東方政策と私：日本との出会い」

ムハマド・ハフィズ・ビン・オスマン氏（Muhammad Hafiz bin Othman）

国際協力機構（JICA）マレーシア事務所 シニア・プログラム・マネージャー

プロフィール：マレーカレッジ・クアラカンサー、マラヤ大学東方政策日本留学特別コース、筑波大卒。

東京三菱銀行に勤務後、マレーシアに帰国し、マハティール首相時代の東方政策室（日本デスク担当）、国際交流基金クアラルンプール事務所勤務を経て現職。箏（生田流）、お茶（裏千家）など日本の伝統文化をたしなむ。天皇皇后両陛下（当時）及び皇太子殿下とのエピソードを綴ったテレビ番組（TBS 皇室アルバム・日テレ皇室日記・フジテレビ皇室ご一家など）も多数。平成30年外務大臣表彰受賞。

◆ 報告概要：アザム氏からは、ご自身の経歴と併せ、Look East Policy の概要とその成果、つまり、技術や経営ノウハウの学びは成功したが、「Values 価値観」に関してはまだやり残したことが多いということが指摘された。ご自身の将来の展望としては、日本とマレーシア社会への「恩返し」＋「架け橋」になること、主に「学術・教育」、「ビジネス」、「社会的活動」という 3 方面から取り組もうと思っていることが述べられた。Look East Policy の将来の展望としては、「Look East」から「Work with East」、産学官民における相互補完的な関係を築き、社会コミュニティーレベルの交流や帰国後の留学生に向けた新しい「受け皿」が設けられることにより、高付加価値な関係へと発展していく可能性が指摘された。

ハフィズ氏からは、父や祖父から聞いた日本占領時代の話がハフィズ氏にとっての日本に対する原体験であり、日本の良い部分しか知らないまま、日本のアニメやドラマを通して日本人の素晴らしさを知り、日本留学への夢が募っていったこと、協力隊の日本語教師らにより日本語、日本の良さをさらに学んだことが語られた。その一方で、実際に留学した先の日本の大学では、マレーシアに関心のない年代の若者の存在があり、就職した日本の民間企業では日本の裏の姿を体験することになった。天皇皇后両陛下（当時・現上皇ご夫妻）とのエピソードが綴られた TV 番組の上映をはさみ、現在、JICA 現地職員として勤務する傍ら、琴を通じて日本をマレーシアの人に紹介する活動を行い、若い世代に日本のすばらしさを伝え、日本とマレーシアの架け橋になりたいという意欲が語られた。

◆ 質疑応答概要：東方政策は、良い面だけでなく、悪い面もあったはずだが、その両面をおふたりはどう整理していこうとしているのか、アザム氏に対し、日本の「失われた 30 年間」を取り戻す活動をしたいとのことであったが、具体的に考えている方法としてどのようなことがあるのかといった質問がなされた。将来に向けて明るい方を見ていく方が将来も明るいといった、マハティール元首相のことも引用されつつ、おふたりの考えがそれぞれ述べられた。

.....

主催：「マレーシア東方政策 40 周年記念特別セミナー」実行委員会：【主管】松永典子研究室（九州大学）、JICA 九州センター、福岡県青年海外協力協会、福岡県青年海外協力隊を支援する会、福岡マレーシア友好協会、（一社）地域企業連合会九州連携機構、九州国際学生支援協会

【科研課題番号：22K00668・研究課題名：歴史学習・遠隔協働学習を通した平和共存のための日本語教育研究・研究代表者：松永典子】



マレーシア東方政策40周年記念特別セミナー 記念写真 令和4年10月



同化主義政策から多文化共生社会への道のり

吉田 曜子（昭和 61 年度 1 次隊 日本語教師）

1986 年から 1988 年まで過ごしたイポーを再訪したのは、2001 年。

事前になんの連絡もせずに、元の職場を訪れた。

タクシーで校庭に降り立ったとたん、校舎から飛び出してきた人がいた。私の名前を何度も呼びながら、『サーヤが亡くなったの。』と泣きながら抱きついてきた。隊員時代、同い年の同僚が 4.5 名いて、私たちは、しょっちゅうどこかに集まってお茶会をしていた。そのなかでも、サーヤは特別な存在で、前任者から引き継いで、しばらく一緒に暮らしていた。

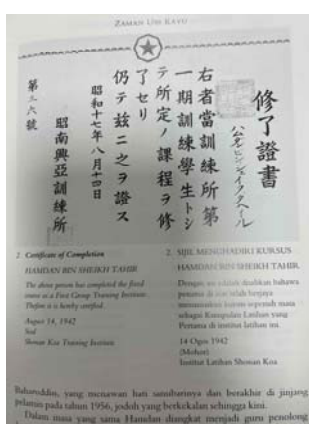
当時、私はあまりマレー語も話せなかったが、彼女たちは辛抱強く、私の話を聞きながら、私の目を少しでも大きく見せようと、アイラインで目の周りを黒く染めることに夢中になった。どんなに頑張っても、私の目は彼女たちのように大きくはならず、すぐに彼女たちの興味は薄れた。日本という国についても彼女たちの関心はあまりなかった。

第二次世界大戦の後、イギリスの援助によって設立された全寮制の中高等学校で授業も英語で実施されていた。なぜ、そんな学校に突然、日本語の授業が始まり、隊員が派遣されたのか、JICA 本部や調整員に聞いてもわからなかった。ただ東方政策による日本留学のためという理由だった。そして再訪したその週末に、学校の OB 会が開催されることがわかり特別に招待してもらうことになった。そして、思いがけず、この学校の初代校長だった HAMDAN 御夫妻の隣席に案内された。このことがきっかけで、翌日、御自宅に招かれることとなった。



マハティール首相の側近と言われていた HAMDAN 氏とマレー語で話すのか、英語で話すのか、マレー語の敬語は？などと悩んでいるうちにタクシーは豪邸の前に到着した。

執事に案内されて応接室に足を踏み入れたとたん、『よくいらっしゃいました。今日は あなたに見ていただきたいものがあるのです。』と HAMDAN ご夫妻。



突然の彼らの日本語に驚いていると手渡されたのは『 TUN HAMDAN-GURU SEPANJANG HAYAT 』。そして、その中に、1944 年に日本語教員養成所助手に任命されたことが記してあった。戦後 HAMUDAN 氏は、イポーの学校の初代校長になった後、教育大臣を務め、東方政策が始まると同時に、マレーシアから日本の各大学に留学させるための基盤を首相に提言したということであった。今でも日本の歌は覚えていますよ、という夫人と一緒に『真白き富士の気高さを・・・』を口ずさんだ。私の母もよく歌っていたので歌詞の意味もわからず覚えていた。日本語教育の歴史は戦前、戦後と断

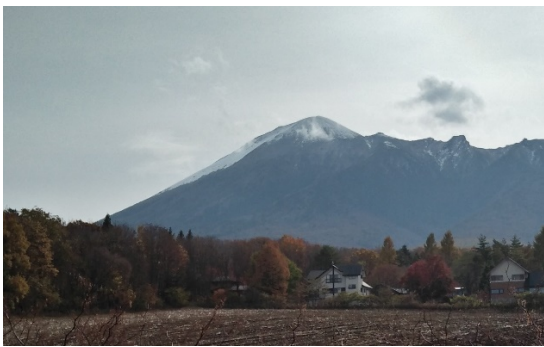
絶されて語られることが多く、隊員時代の無知さを自戒する機会となった。なぜ私が突然、イポーの地で日本語を教えることになったのか、戦時中からこれまで、日本語教育は名前や形を変えて続いてきたのだ。今、私は『多文化共生社会における日本語教育支援』のセミナーを実施するたびに、この日のことを思い出す。

『ふるさとの山に向かひて言ふことなし

ふるさとの山はありがたきかな』

遠藤 清美 （昭和 55 年度 2 次隊 家畜飼育）

ボゴールはインドネシアの西ジャワに位置し、ジャカルタから南に約 60km、車で 1 時間ほどのところにある都市です。高原地帯にあるため、1 年を通して涼しく、大統領宮殿、ボゴール植物園、ボゴール農科大学、国際林業研究センターなどがあります。ボゴールは「雨の町」(Kota Hujan) ともよばれ、年間降雨量は平均約 4,000 ミリに達するとも言われ、乾季でも雨の多い町です。私は JICA 研究プロジェクトで 5 年間ボゴールに住んでおりました。ボゴールから見える山々は、故郷の岩手山によく似ており、インドネシアにいても、いつでも故郷にいるような、そんなありがたい山でした。



岩手山（標高 2038M）



パングランゴ山（標高 3019M）

左の写真は、八幡平市から見た岩手山、右がボゴール市内から見たパングランゴ山です。標高の違いはありますが、成層火山であり、その火山体の形成が似ていることは、どちらも複数回の噴火をしていることになります。岩手山麓には緑豊かな山々が広がり、山麓からの河川が北上川に合流しています。ボゴールでも、緑豊かなパングランゴ山からの河川がチリウン川とチサダネ川に流れています。

岩手にはアイヌ語の「川」の由来ではないかという説の地名が多くみられます。例えば、岩手の沼宮内（ぬまぐない）、黒内、米内など、アイヌ語で「川」を意味する「ナイ」の地名が各所に存在します。また、ボゴールにもスンダ語で「水：Ci」の地名が Cikore、Cisarwa、Cianjur、Cirebon など数多くあり、岩手でもボゴールでも、昔は川を大事にし、水を汲み、魚を取り、山麓での狩猟もできるという衣食住の生活空間が山や川にあったことが想像されます。1000 年前の昔には、岩手の平泉文化が花開いた時ですが、ボゴールの西ジャワ地方では、スンダ王国が栄えた時代でもあり、人々は仏教・ヒンドゥー文化に大きく影響されたことを示しています。このように岩手とは気候特性の違いはあるものの、人々が住む地形や環境、文化の共通するところも多く、人々の性格も岩手と似かよったところもあったかもしれません。

ボゴールの人たちは、温厚で真面目なタイプが多く、目上の人をととても大切にしてくれました。また、南国特有の明るさも持ち合わせています。ボゴールの人たちの性格と緑豊かな大自然のお陰で、長くインドネシアで生活できたと思っています。私は、この 2022 年 10 月に帰国しましたが、岩手山を眺めたときに、ボゴールのパングランゴ山が懐かしく思い出されます。インドネシア 20 年間の無事を「ボゴールの山はありがたきかな」と感謝をしているところです。

第6回総会開催について

2022年10月30日に、マレーシア会例会(役員会)を2年9ヵ月ぶりに市ヶ谷のJICA地球ひろばで持つことができました。例会の議題としては、①会報(20号報告と21号・22号発行)、②会計報告、③次回の第6回総会開催、④地区集会、⑤今後の活動の五つの件について話し合われました。

その結果、①の会報については、本号が21号であり、また22号は2023年6月を予定しています。③の延びのびになっている総会開催については、コロナの感染状況を把握しながら、2023年の9月頃の開催を目指しております。本件については、22号会報で詳細をお知らせすることになりました。再々の延期で申し訳ありませんが、コロナの感染拡大が収まらない中、ご了解をいただきたくお願いいたします。開催内容等についてご要望等がありましたらお寄せください。④については、東北地区集会を念頭に総会実施後に検討することになりました。

訃報

マンソール先生(語学講師) 2022年10月
斎藤 勉さん(昭和62.3) 2022年7月
笹生 隼八郎さん(昭和42.2) 2022年8月
ご逝去との知らせを受けました。
心よりご冥福をお祈りいたします。

編集後記

マハティール元首相の提唱で始まったルックイースト政策が40年になるのだと改めて、時の流れを感じています。そのマハティール氏はいまだ健在で、先日の選挙にも出馬。アンワル氏に敗北の形となりましたが、そのエネルギーに敬服いたします。今年の漢字は『戦』と決まるほど、世界はきな臭くなってきて心配ですが、今号もOB・OGのたゆまぬ活動ぶり、活躍ぶりをお届けすることができました。

原稿募集 マレーシア会会報への原稿は随時受け付けています。OB・OGに向けて発信したいこと、活動紹介、職場紹介、日々の暮らし、知りたいことなどお寄せください。

寄付のお願い!

寄付は随時受け付けております。

よろしくお願いいたします。

振り込み先:

郵便局記号: 10140 番号 51611341

(郵便局外から振り込みの場合: 店番 018、
普通口座 5161134 です)

口座名義人: 青年海外協力隊マレーシア会

代表 白山 肇

事務局からお願い: 住所、メールアドレスを変更された時は下記連絡先までお知らせください。現在郵送で会報が届いている方で、パソコンのメールアドレスをお持ちの方もご連絡ください。メール会員として登録し、随時、共有情報をお届けします。

マレーシア会は国際協力サロン内に事務局を置きます。なお、この会報は青年海外協力隊マレーシア会会員と2010年の青年海外協力隊OB/OG会出席者にEメールもしくは郵送の形で送りしています。配信を希望されない方はご連絡ください。また、会員は現在630余名となりました。まだ、会員登録されていない方には、是非マレーシア会のことお知らせください。

発行 青年海外協力隊マレーシア会
会長 白山 肇

162-8433

東京都新宿区市ヶ谷本村町10-5

JICA地球ひろば メールボックス 51

TEL: 090-7186-1065 (国際協力サロン)

MAIL: malaysia@ics-together.com

https://ics-together.com/office_jocvmalaysia.html

(2022.12.25 発行)